

平田オリザ

劇作家
演出家

「小さな世界都市」豊岡ほど 夢と希望のある地域はない

聞き手●渡邊直樹 本誌編集長 写真●米田真也

平田オリザさんは昨年9月、兵庫県豊岡市に移住。
主宰する劇団「青年団」も移転し、本拠となる「江原河畔劇場」が今年4月に完成した。
豊岡には演劇・ダンスと観光を本格的に教える
兵庫県立国際観光芸術専門職大学（仮称）も来年開校予定だ。
演劇はじめ、アーティストが苦境に立たされている今、
平田さんに演劇による地方創生を聞くため、完成目前の劇場を訪ねた。



Oriza Hirata

1962年東京都生まれ。国際基督教大学在学中に、劇団「青年団」結成。
戯曲の代表作に「東京ノート」（岸田國士戯曲賞受賞）、「その河をこえて、五月」（朝日舞台芸術賞グランプリ受賞）、
「日本文学盛衰史」（鶴屋南北戯曲賞受賞）など。2011年フランス文化通信省より芸術文化シュヴァリエ受賞。
著書に「芸術立国論」「演劇入門」「下り坂をそろそろと下る」など。
現在、四国学院大学文学部教授、城崎国際アートセンター芸術監督ほか。

演劇的手法を使った教育を 小中学校の授業に導入

渡邊 なぜ豊岡に移住され、拠点となる劇場もつくろうと思ったのか。平田さんと豊岡市との関わりから聞かせてください。

平田 はい。元々地方に呼ばれることが多くて、大学では文化政策みたいなものを教えてきました。順番でいうと、城崎国際アートセンターができたのが2014年です。最初は地域からの理解が得られなくて、老舗旅館の西村屋さんの今の会長さんは「不良外人の溜まり場になる」とよくおっしゃっていました（笑）。地元を理解を広めるために、僕も講演会をたくさんして、西村屋ホテル招月庭のロビーで朗読会をしたり。その一環として、城崎小学校で演劇のモデル授業をしたんです。

豊岡市の教育は 目に見えて大きく 変わりつつある

る学力」という概念を提唱されました。

このままの教育をしていては、優秀な若者はどんどん外に出て行き、村は衰退してしまふ。共同体を守り育てるような学習に変えていかなくてはいけない。当時は高度経済成長の時代ですから、東京、大阪にだけ子どもを出すかで評価されていたときに、そうおっしゃっていた。豊岡（旧合橋村）の出身で、但馬で生涯を終えられています。今も「東井義雄記念館」があります。日本中から教育者が訪れます。豊岡市の今の教育長がその教え子ぐらいの世代です。だから、伝統に裏打ちされているということでもあります。

渡邊 高校の授業でも？

平田 この4月から本格的に、それぞれの高校で独自性を持って、どう使うかを模索してもらい、来年の4月には4年制の大学ができますので、大学ともつなげていこうと。豊岡市の教育は、目に見えて大きく変わりつつあります。

劇場は本来、総合病院に 近いと思っっている

渡邊 アーティスト・イン・レジデンスは各地で行われていますが、城崎国際アートセンターはパフォーマンスグレート（舞台芸術）に特化しているのが

そのときまたまた見に来ていた教育長が、直感的にこれだと思ったらしく、すぐに市長とかけあって、「この授業を豊岡市内の38の小中学校全校で実施したい」と。年度末に近かったんですが、急に予算にも入って、市内のすべての小中学校の校長先生、教頭先生を呼んで、僕の講演会を聞かせて、教育長がその場で、年度が明けたらモデル校を5校定めると。そして、そのモデル校で僕が実際に授業をしてみせました。そのモデル校の一つが豊岡小学校で、その校長先生が今は教育長になられて、今ではすべての小中学校で先生方が演劇的手法を使ったコミュニケーション教育の授業を行っています。

狙いは、もちろん子どもたちの教育のためですが、もう一つは地方創生です。Iターン、Jターンを呼び込むのに、教育政策をきちんとしていない人は来ませんから。実際に地方創生予算も使っています。もう一つは教員育成です。中学の先生は1年生の担任になつたら、担当教科にかかわらずこの授業をやらなさいといけません。演劇的な手法を学ぶことによって、自分の教科の授業も、アクティブラーニング化できるんじゃないかと。

兵庫県の但馬地域の人口は16万人し

特徴ですね。

平田 美術のアーティスト・イン・レジデンスのいいところは、作品が残るということですね。それに対して、パフォーマンスアーツのいいところは、その舞台が世界中を回ってくれることです。ヨーロッパでは、その作品がど



完成した江原河畔劇場は、旧豊岡市商工会館をリノベーションしたもの。青年団の劇場兼事務所となる。劇場のある豊岡市日高町は、平田さんが尊敬する冒険家の植村直己さんの生誕の地でもある。（写真提供：青年団）

こでつくられたかというクレジットは、半永久的に残ります。だから、いろいろなダンス作品や演劇作品に必ず「城崎—豊岡」というクレジットが入ります。するとヨーロッパの人たちは「KINOSAKI TOYOOKAをいろいろなところで見ると、どこなんだ？」

かいません。そのうち豊岡は8万人です。しかし面積は非常に大きくて、但馬で東京都と同じ、豊岡は23区とほぼ同じ面積があるので、教員自らが希望しなければ、但馬圏内での異動になります。神戸とかに異動することはあり

と。それで口コミで広がっていった。

渡邊 KINOSAKIブランドですね。

平田 そうです。城崎のアーティスト・イン・レジデンスは、かつて文人墨客を招いて2カ月逗留させて書を書いてもらったりという城崎の伝統に支えられているところもあるんです。だ

けど税金を使うので、そのための理屈もなくてはいけません。で、僕が考えた理屈はこうです。

2012年に劇場法ができ、公共ホールが劇場制作に本格的に乗り出すようになりました。日本では、劇場といえば演劇を観に行くところ、音楽を聴きに行くところというイメージですが、本来は（総合）病院に近いと僕は思っているんです。けがや病気を治してあげるのには病院の仕事ですが、そのほかに健康相談や健康診断もしている。これは劇場でいえば、ワークシヨップみたいなものですね。それから、病院では新薬の開発や医療技術の開発、研究もしている。それが総合病院なんです。劇場も同じで、観せることもやる

けど、教育普及もやるし、作品も創る、というのが本来の劇場の役割なんです。それを定めた法律が劇場法です。ところが、日本の公共劇場は今までは創る機能を持っていなかった。ヨーロッパだと、劇場が劇団を持っていたり、劇場自体がアーティストを滞在させるレジデンス施設を持っています。日本にはそういうものがなかったもので、例えばフランスから20人のダンスカンパニーが来ると、東京だと1泊1万円ぐらいしますから、20人が1カ月滞在すると600万円、2カ月いたら宿泊費だけで1200万円かかる。でも、パリから羽田まで行くのと、パリ→羽田→鳥取は、パリで航空券を買うと同じ値段なんです。城崎国際アートセンターなら宿泊費はゼロですから、1時間の乗り継ぎを我慢するだけで、600万円とか、1200万円浮くわけです。だから、皆来るようになる。僕たちも内心では、こんな遠いところにつくって誰が使うんだろうと。成功するかどうか半々ぐらいの感じだったんですが、ふたを開けてみたら、城崎は東京からは遠いけど、パリから見たら変わらない。これは豊岡市のコンセプトの「東京標準で考えるな、世界標準で考えろ」「小さな世界都市」とまさにぴたり。世



劇場の改装の資金はクラウドファンディングで募った。最後の仕上げは劇団員自らが行ってた。

ません。若手教員を育てておけば、確実に但馬のためになるんです。

渡邊 なるほど。

平田 もう一つは、但馬に東井義雄先生という教育者がいて、その方が昭和30年代に「村を捨てる学力、村を育て

けど、教育普及もやるし、作品も創る、というのが本来の劇場の役割なんです。それを定めた法律が劇場法です。ところが、日本の公共劇場は今までは創る機能を持っていなかった。ヨーロッパだと、劇場が劇団を持っていたり、劇場自体がアーティストを滞在させるレ

ジデンス施設を持っています。日本にはそういうものがなかったもので、例えばフランスから20人のダンスカンパニーが来ると、東京だと1泊1万円ぐらいしますから、20人が1カ月滞在すると600万円、2カ月いたら宿泊費だけで1200万円かかる。でも、パリから羽田まで行くのと、パリ→羽田→鳥取は、パリで航空券を買うと同じ値段なんです。城崎国際アートセンターなら宿泊費はゼロですから、1時間の乗り継ぎを我慢するだけで、600万円とか、1200万円浮くわけです。だから、皆来るようになる。僕たちも内心では、こんな遠いところにつくって誰が使うんだろうと。成功するかどうか半々ぐらいの感じだったんですが、ふたを開けてみたら、城崎は東京からは遠いけど、パリから見たら変わらない。これは豊岡市のコンセプトの「東京標準で考えるな、世界標準で考えろ」「小さな世界都市」とまさにぴたり。世